

古代の日田：日田盆地の考古学

小田, 富士雄
九州大学九州文化史研究施設

<https://doi.org/10.15017/7178632>

出版情報：九州文化史研究所紀要. 15, pp.105-145, 1970-03-25. 九州大学九州文化史研究施設
バージョン：
権利関係：



古代の日田

―日田盆地の考古学―

小田 富士雄

一、日田盆地の風土

二、先史時代における文化交流

三、日田の古墳文化

四、装飾古墳文化の系譜

五、古代の日田

付・日田市内遺跡地名表

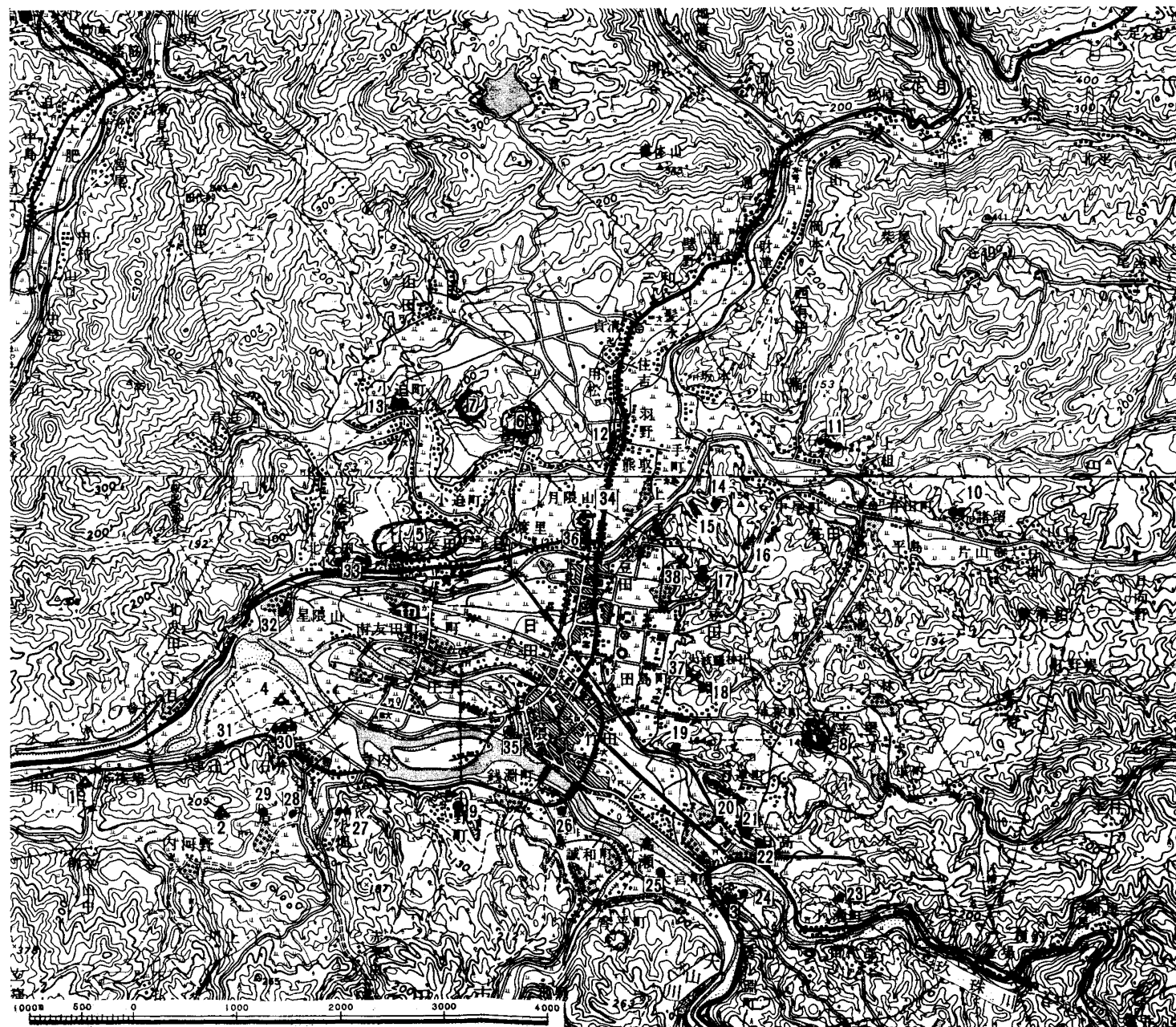
豊後地方須恵器編年図

古代の日田（小田）

古代の日田(小田)

一、日田盆地の風土

筑後川の上流、北からの花月川と南からの大山川が合流するところに日田盆地が形成されている。盆地の周辺は新第三紀層を基盤とする筑紫溶岩の山地がとりまいていて、盆地に面した海拔二百〇四百米の高台地は耶馬溪溶岩、一五〇米程度の低台地は阿蘇溶岩で形成されている。盆地の広さは東西約三・五軒、南北約四・五軒におよび、北半部は低台地と水田が交錯した地形をなし、先史時代の集落と農耕地の開墾に適している。南半部は花月川と大山川、玖珠川が合流してできた三隈川がいくつかの中洲を形成して生活面としてはやや不安定な沖積低地となっている。盆地の東寄りには台地裾部の最も安定した生活面で、現在の日田市街の中心部はここに発達している。亀山公園、月隈山、星隈山は阿蘇溶岩の残丘で、剝抜横穴古墳などに加工しやすい岩壁を露呈している。日田盆地は周囲を山で囲まれていたので小天地を形成しやすいが、文化的にも孤立しなかったのは、三隈川が西に流れて筑後川につながり、花月川を北にさかのぼって豊前下毛郡に通じ、大山川を南にさかのぼって肥後阿蘇地方に達し、玖珠川を東にのぼって豊後玖珠郡に及び、玖珠郡からさらに大分郡につながっているからである。このように日田盆地は九州の東西を結ぶ捷路の中経地に位置している。このような地理上の位置が古来、日田盆地の歴史的品格を規定する面が多いのは当然のことながら見逃せないところである。しかしながらこのような風土は、また独自の文化を確立することをさまたげる面をもっている。日田盆地の風土が先史時代から古墳時代を経て律令時代にわたる歴史の流れとどのようにかかわっているのだろうか。筆者は日田盆地の考古学調査を通じてこの方面を追求することを意図している。日田盆地の考古学調査は全般的にあまりすすんでいない現状であるが、これまでの成果を整理して今後の問題点がひき出せるならば本稿の目的も達せられたといえるべきであろう。



第 1 図 日田盆地遺跡分布図（五万分之一地図「吉井」・「日田」分載）（No.は遺跡地名表参照）

二、先史時代における文化交流

日田盆地の周辺でたしかめられている最も古い遺跡は四ヶ所の縄文遺跡である。

川下遺跡 日田市高井字川下

隈山遺跡 日田市石井町隈山

原遺跡 日田市内河野字原

大部遺跡 日田市大部町大部

これらの遺跡はいずれも三隈川をのぞむ以南の地域にあって、盆地の南縁部に限られている。後述する弥生時代の遺跡とは著しく対照的な分布を示している。

川下遺跡は分地の南西隅にあたり、堂尾川が三隈川に合流する左岸の丘陵裾に位置する。多くの縄文土器が採集され、穴井通照氏が整理報告をされた。⁽¹⁾ 土器の示すところは早期押型文土器（穀粒文、山形文の二種）と後期土器の二期に大別できる。後期土器には磨消縄文系土器が主体をなし、北久根山式や御領式がみられるので、後期を中心に栄えた遺跡であったと思われる。また主体をなす磨消縄文系土器は鐘ヶ崎式ともやや異なり、豊後の海岸沿いに分布する瀬戸内方面のものへの系譜がたどられて興味深い。また北久根山式土器の存在から肥後地方につながる文化系統も無視しえない。

隈山遺跡は三隈川と花月川が合流するところに形成された沖積地にあり、土偶の腹部破片が採集された。⁽²⁾ 其伴遺物がなく、またこの土偶片も現在行方不明になったという。現地地形からみて上流から流出してきてここに堆積したと考えられる可能性がつよい。

原遺跡は隈山遺跡の南にあたる台地の南側にあたり、穀粒押型文土器を出土している。

古代の日田(小田)

大部遺跡は大山川と玖珠川が合流するあたりに面した丘陵の西側に位置し、御領式土器が発見されている。

この地域の縄文遺跡は未だ学術調査を終たものが一例もなく、いずれも採集資料によってうかがうにしかすぎない。現在まで知られた前記遺跡のうち、川下、原両遺跡では早期の資料が発見され、川下、原、大部はいずれも後期遺跡である。前期・中期の様子はまったくうかがうことができない。それでも、これまでの資料から縄文時代の盆地内はまだ生活の舞台にはなっていないかということのほうがわかるであろう。

弥生時代には次の五遺跡が知られている。

吹上原遺跡 吹上町大字友田字渡里・吹上原

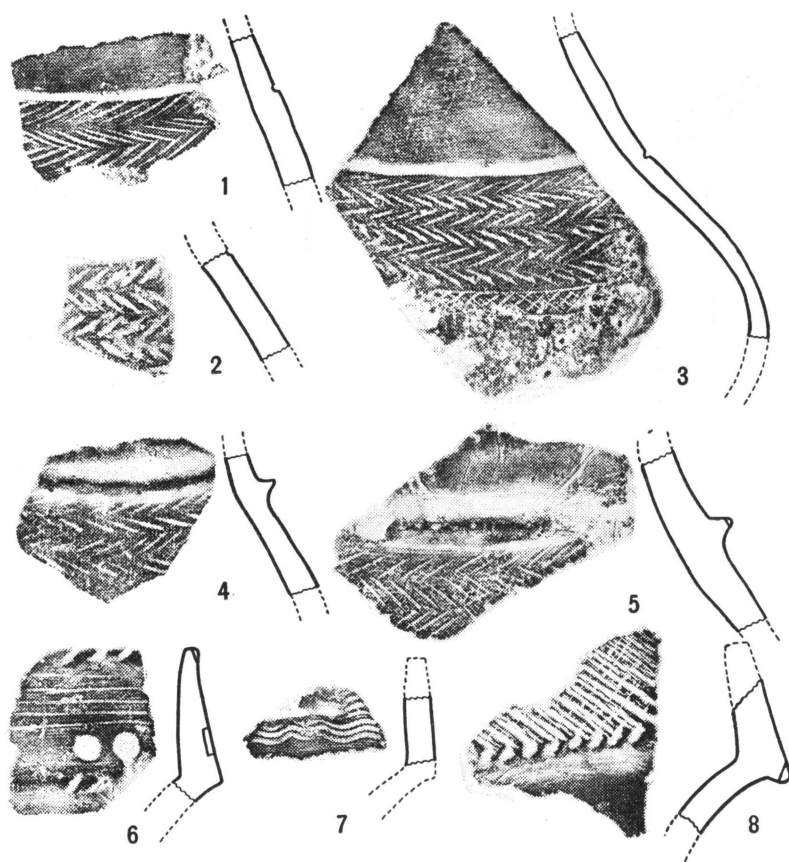
草場遺跡 清岸寺町草場

天神原遺跡 朝日町天神

元宮原遺跡 神来町元宮

上野原遺跡 上野町上野原

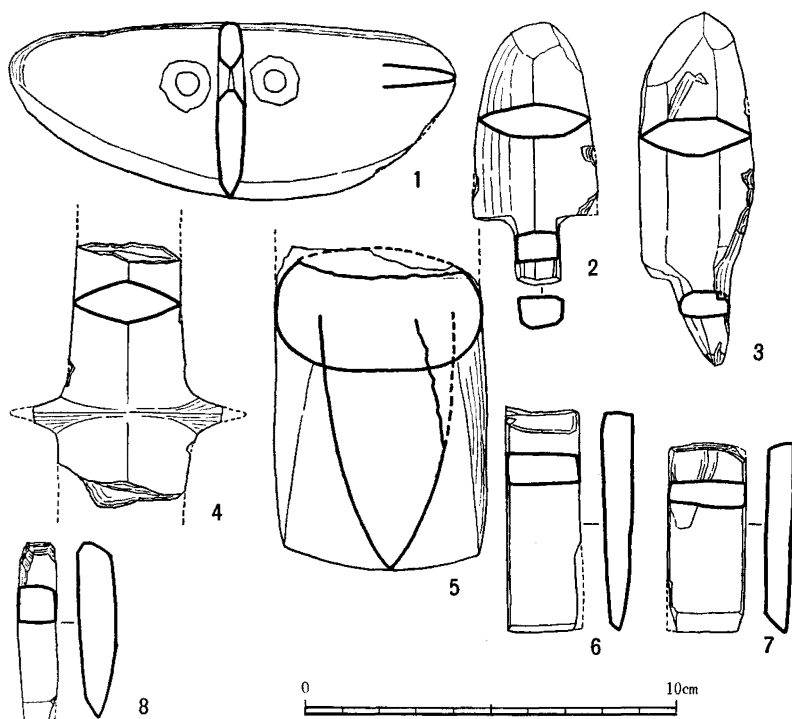
吹上原遺跡は盆地の北半部を形成している花月川に面した広い台地上にあり、早くから土器・石器が採集されて有名な遺跡である。日田盆地における最大の集落遺跡であったと思われる。また、この台地上には甕棺墓も発見されていて、集落と墳墓の組合せが考えられる。この遺跡は広い台地上にあるため、遺跡名が錯雑している。賀川光夫氏が吹上台・後迫の二遺跡に分離して解説されているが、地名上は同一地域に属するので両者を一遺跡としてあつかった。この遺跡から発見される土器は前期から後期に及んでいるが、前期土器の示すところによって日田盆地に弥生文化が及んだ時期をうかがえば、北九州の板付Ⅱ式以前にさかのぼる資料はないので、前期中頃であったと思われる(第2図)。いわゆる羽状文を主体とする壺形土器が発見されており、隆起帯を伴うもの(同図4)までみられる。中期には須玖式土器が流行している。これに伴う石器には水成岩製の石庖丁(第3図1)、安山岩製の磨製石斧(同図5)、頁岩製



第 2 図 吹上原遺跡採集の弥生土器拓影 (1/2大)

の扁平片刃石斧(同図6)、石のみ(同図8)、粘板岩製の有柄石剣(同図4)、有柄磨製石鎗(同図2・3)などがみられる。以上の組みあわせから、中期頃までの傾向は北九州弥生文化の要素を变容することなく受容していたと推測される。

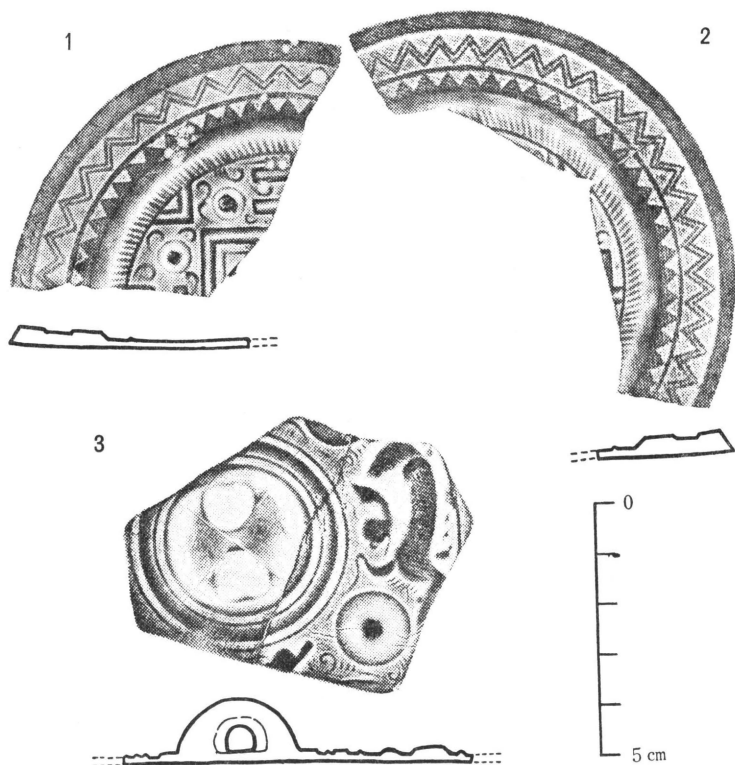
またこの遺跡からは中々後期の墳墓群が発見されているが、中期では主として合口甕棺を用いているようであるが、単甕棺や石蓋甕棺、組合式箱形石棺なども行われている。後期に属する珍しい葬法として合口甕棺の上甕を石棺材で囲ん



第3図 吹上原遺跡採集の石器実測図

で一種の外郭施設としたものがある。⁽⁴⁾後期に及ぶ頃までは北九州の様相と特別変った点は指摘できないので、筑後地方からの流入ルートが考えられるが、終末期になると東九州地域に盛行する畿内系の櫛目文土器があらわれている^(第2図7)。いわゆる「く」字形断面の口縁をもち卵形胴をなす壺形土器が出現する^(同図6)。この時期の九州地方に顕著となる北九州系文化の後退と畿内系文化の流入という大勢は日田盆地にあって例外でなかったというべきであろう。

草場遺跡は吹上原遺跡の北方台地にあり両者の間には水田低地がみられる。この遺跡は組合式石棺、甕棺を主体とする墳墓群で弥生中期から後期に及ぶ。この遺跡で注意されるのは、石棺から副葬品として漢鏡片の発見があったことである。日田盆地において弥生遺跡から漢鏡が発見されたの



第4図 副葬された漢鏡片三例(3/4大)
(1. 日田市草場, 2. 八女市亀ノ甲, 3. 玖珠郡名草台)

は現在までのところ、この一例
をおいて他にない。この鏡鑑は
後漢代に流行した方格規矩文鏡
に属し、本来径一二厘ばかりあ
ったものの約四分の一の破片で
ある。現存する部分は平縁幅一
・六厘に陽起鋸歯文と複線波文
をめぐらし、内区には周辺に櫛
歯文帯をめぐらし、方格の一部
と乳文、T・L・V文、それら
の間をうずめる唐草文をみるこ
とができる(図1)。このような
漢鏡片を副葬する例はいくつか
あるが、日田盆地の近くにさが
せば、西では筑後・八女市室岡
亀ノ甲遺跡の第九五号石棺から
発見された方格規矩文鏡片があ
る(図2)。これは全円周の約三
分の一にあたる破片で、複原径

古代の日田(小田)

一・二種と草場例よりやや小形であるが、外区の文様、内区にわずかにみえる逆方向のL字文などまったく草場例に類似している。また東では隣接する豊後・玖珠郡玖珠町名草台の組合式箱形石棺より出土した獣帯文鏡片がある(図3^(第4))。これは外区を欠いているが鈕座を含む獣帯文の破片で、複原径は一四釐をこえるかと思われる。内区を乳文で四区に分ち、左廻りに旋回疾駆する四獣を配したもので、半肉彫りの手法がみられる。この遺跡は弥生末期から古墳時代に及ぶ石棺群集墓である。弥生時代においては日田盆地を東西に結ぶ地域では漢鏡の入手が容易でなく、また破片であっても如何に貴重品であったかを知ることができる。

天神原遺跡は草場遺跡の西方にあたり、賀川光夫氏が宮ノ原遺跡として登録されたものである。⁽³⁾ここでも草場遺跡同様、甕棺・石棺の群集した弥生墓地で、約百個のガラス製小玉が発見されたこともあるという。また、ここでも後期の合口甕棺の上甕を石棺材で外郭状に囲うた例が報告されている。⁽⁴⁾

元宮原遺跡は豊後三好駅の北東一杆余の台地上にある墳墓で、開墾にともなうて多くの甕棺・石棺・石蓋土壙などが発見されたが、未調査のままに湮滅したという。

上野原遺跡は三隈川左岸台地上にある墳墓で、後期甕棺が発見された。甕棺は日田市立博物館に収蔵されている。

以上の弥生遺跡を通じて、弥生時代における日田盆地の状態をうかがってみれば、盆地の東および南の周縁台地上におのおの墳墓遺跡一ヵ所が発見されているが、ある程度の規模をもって比較的安定した集落を営み墳墓をつくったのは、盆地北半部を占める吹上原・草場・天神原などの遺跡を擁した台地であった。この地域は北から盆地の東縁山麓にそって流入する花月川の右岸にあたる。台地と花月川の間に比較的安定した沖積低地をつくり出し、水田耕作に適した環境を呈していたのである。現在の日田市街以西の低地部は三隈川と花月川の合流するあたりで未だ生活面としては十分に安定した状態でなかったであろう。盆地の南半部に弥生遺跡がきわめて貧弱な現象はこのようなところ起因しているというべきであろう。

弥生時代にあってこの地方で注意すべきものに青銅利器の発見がある。現存するのは次の三口の銅矛である。

広鋒銅矛一 日田市石井・石井神社蔵

中広銅矛一 日田市田島町大原・大波羅神社蔵

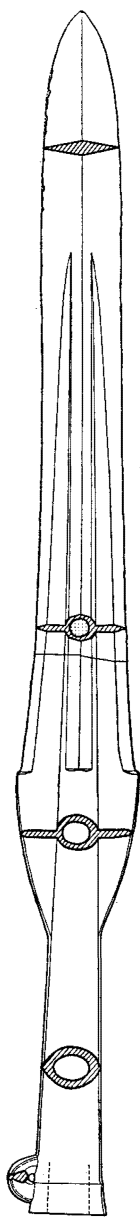
中広銅矛一 日田郡大山村・老松神社蔵

いずれも出土地を明らかにしないが、日田盆地およびその周辺の出土品であろうと考えられている。また日田郡の西南、肥後に近い日田郡津江山から銅矛二口発見されたという記録が「百鍊抄」第十三にみえている。

安貞二年（二三八）七月六日。有軒廊御卜。安樂寺言上去嘉祿元年（二三五）五月比豊後国津江山住人等於^二彼峯^一作^レ畠之間掘^ニ出金銅鋒二枝^ニ事。

この津江山発見の銅矛はどのようなものであったか知ることはできないが、現存する三口の銅矛のうち、大波羅神社と老松神社の銅矛は大きさ、形態にいたるまできわめて近似している。今、実測した老松神社例についてみると、全長七〇糎、添黒色の良質である。袋部の奥には中茎型砂が付着している。日田盆地の青銅利器の性格を明らかにするために、大分県内における青銅利器の一覽表を作成してみると次のようになる。⁽⁵⁾

第5圖 日田郡大山村・老松神社の銅矛実測図（全長七〇糎）



発見地	種類・数量	出土状況
1・宇佐郡安心院町且尾・谷迫	中広銅矛7	高塚古墳, 石棺
2・" 長洲町金屋・ベウモリ	広鋒銅矛1	
3・" 駅川町法鏡寺・下ノ平	広鋒銅矛1	
4・" 宇佐町宇佐八幡宮蔵	広鋒銅矛2, 広鋒銅戈7	
5・" 麻生村山口・赤迫	広鋒銅戈1	
6・豊後高田市米縄	広鋒銅矛12 (13?)	箱式石棺 前方後円墳封土
7・" 美和・雷	広鋒銅戈2	
8・" 草地・猫石	広鋒銅戈3	
9・" 嶺崎・横峰	広鋒銅矛1	
10・東国東郡内(出土地不明)	広鋒銅矛1	
11・杵築市野田新宮	銅剣(細形?) 1	弥生式土器散布地 弥生後期土器散布地
12・速見郡山香町広瀬北ノ原	広鋒銅矛1	
13・" 日出町真那井	広鋒銅矛7	
14・日出町大津	広鋒銅戈2	
15・日田郡大山村・老松神社蔵	中広銅矛1	
16・日田市石井・石井神社蔵	広鋒銅矛1	
17・" 大波羅神社蔵	中広銅矛1	
18・玖珠郡玖珠町森・三島神社蔵	中広銅矛2	
19・" 玖珠町・帆足神社蔵	中広銅矛2	
20・大分郡大南町松岡・京尾	中広銅矛5	
21・直入郡久住町鉢木	広鋒銅戈1	
22・大分市滝尾・岩屋	狭鋒銅戈1	
23・" 坂ノ市町浜	平形銅剣4	
24・" 坂ノ市町久原	狭鋒銅戈片 1	
25・" 坂ノ市町細	狭鋒銅戈1	
26・" 坂ノ市町木田・名辺山	広鋒銅矛2, 広鋒銅戈3	
27・" 坂ノ市町丹生・岡	平形銅剣1	
28・北海部郡佐賀関町幸ノ浦	中広銅矛1	
29・臼杵市下北津留・坊主山	広鋒銅矛7	
30・" 諏訪・中山	広鋒銅戈1	
※31・日田郡津江山	銅矛2	

「百鍊抄」13・安貞2・7・6条

中広銅矛は日田郡、日田市で二口、玖珠郡で四口、北接する宇佐郡安心院町で七口、大分郡で五口、北海道郡で一口とたどることができ、そのルートは筑前朝倉郡、筑後浮羽郡の筑後川流域から日田盆地を経て玖珠―大分―北海道への流入を考えることができる。すなわち筑後川をさかのぼり、大分川を下るルートが指摘できるのである。これに對して広鋒銅矛、銅戈は宇佐―豊後高田―東国東―速見のルートを経て直入、臼杵方面への伝播が考えられる。すなわち豊前から周防灘、別府湾沿岸へのルートをとったとみられる。日田盆地は筑前・筑後方面から中広銅矛を東九州に輸入する関門的位置にあったといえよう。

先史時代の日田盆地における遺跡遺物の実態を通じて、この地域が九州の東と西を結ぶ文化交流の中経地であったことが明らかとなった。すでに縄文時代においてもその性格は指摘できるのであるが、特に弥生中～後期頃から、ほぼ現在みられるような日田盆地の景観が形成され、定形化するにつれて、この地域を経由するルートも次第に固定化してきたものと思われる。

註

- (1) 穴井通照「筑後川上流の縄文土器」九州考古学11・12 昭和三五年
- (2) 江坂輝弥「土偶」七六頁 昭和三五年
- (3) 大分県史料②考古資料 八〇～八一頁 昭和三六年
- (4) 賀川光夫「箱式棺を外部施設とする甕棺」考古学雑誌四〇卷三号 昭和二九年
- (5) 本表の作成は次の文献を参照し、さらに補正を加えた。

賀川光夫「新たに発見された東九州の銅鉾銅戈」考古学雑誌三九卷二号 昭和二八年
大分県史料②考古資料 昭和三六年

大分県文化財調査報告第一五輯（昭和四三年）四六～四七頁掲載の小田作成表

三、日田の古墳文化

古墳の分布は弥生遺跡にくらべて広くみられるようになる。盆地のなかというより周囲の山麓ぞいに高塚古墳や横穴が営造されている。特に盆地の東山麓と南山麓に顕著にみられるのが注意をひく。弥生時代の遺跡分布が盆地の北半部台地に集中していたことと対照してみると、古墳時代には盆地の東南から南部にわたる地域、すなわち三隈川流域の沖積地が開発されて生活舞台が南半部にまで拡大されたことを物語るものであろう。しかしながら今日の日田盆地の地形からもうかがわれるように、この地域はいくつもの川中洲を形成していて耕地としてはなお不安定なものがあつたと思われる。

日田盆地における高塚古墳の出現がいつであつたかを決定するには今日まだ資料がととのっていない。言いかえれば北九州に畿内型古墳が出現した四世紀代の実態を明らかにするような調査は行われていないのである。

日田盆地における前方後円墳は次の三例が知られている。

城山古墳 日田市諸留町城山

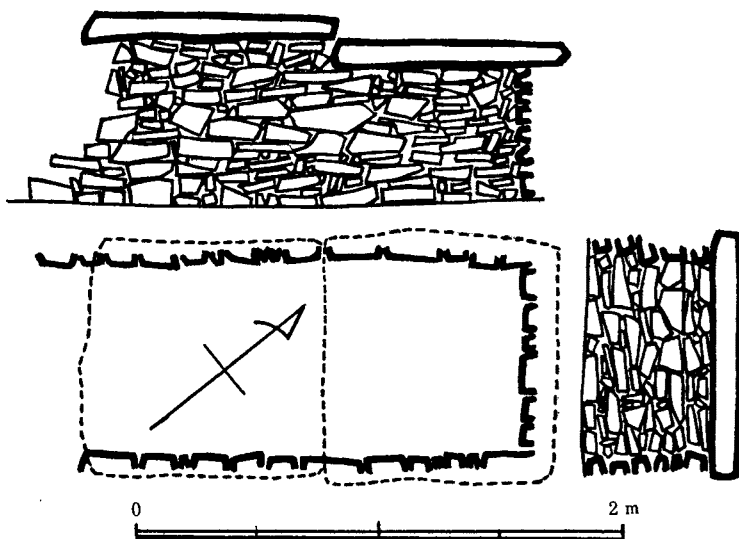
天神山古墳 日田市朝日町才田

丸尾古墳 日田市上城内

城山古墳は玖珠川の北岸にのぞんだ諸留部落の背後丘陵に、前方部を東向きに位置している。未調査。

天神山古墳は才田部落の北方台地に位置し、前方部は西向きである。神社造築の際に大部分が破壊されて内部主体は不明である。遺物は仿製獣帯鏡一面や馬具（杏葉・貝製雲珠）が発見されたというが、筆者はまだ調査の機を得ない（貝製雲珠は第7図2）。
（参考）

丸尾古墳は日田盆地の東を限る山丘上にあり、盆地を望む好所にある。前方部を南向きにとり、自然山丘を利用し



第 6 図 姫塚古墳石室実測図 (賀川光夫氏による)

た感が強い。近年盗掘にかかり、二×〇・五米ばかりの竪穴式石室がのぞかれる。将来学術調査が必要であろう。

以上の三古墳はいずれも学術調査を待っていないが、五世紀をさかのぼらないであろうことが推察される。このほかに五世紀代に比定できる古墳に姫塚古墳⁽²⁾(日田市銭淵町姫塚)がある。三隈川左岸の日田盆地を一望する丘陵上にある円墳で、封土の大部分は削除されているが破壊された竪穴式石室一基と三基の箱形石棺がある。最近破壊が進行して早晚湮滅はまぬがれないであろう。竪穴式石室は安山岩の扁平割石を平積みして構築されており、現存する大きさは七五厘×一・九米である。遺物は鉄剣・鉄鏃・土師器片があったというが、現在みることができない。

このほかに注目すべき遺跡として漢鏡を出土した次の二古墳がある。

日隈古墳 日田市日隈町亀山公園・日隈神社境内

ダンワラ古墳 日田市日高町字東寺・俗称ダンワラ

日隈古墳は三隈川の下流、日田市街の西南端にあたる中ノ島の独立丘、亀山公園にある。元治元年(一八六四)日隈神社境内の一大樹の根元から漢鏡一面が発掘された。古

古代の日田(小田)

墳の状態は不明である。現存する漢鏡は六箇の破片からなり、完形にはやや足りないが、最もすぐれた鏡鑑の一つである⁽³⁾。^(図版 二下)鏡径二三・五釐、平縁細線式獸帶鏡である。文様帯には四葉座乳七箇を等分におき、各間に細線表出による獸形を配している。鈕をめぐる二重圏の間に次の銘文を右廻りに鑄出している。

銅梁作竟四夷服 多賀国家人民息

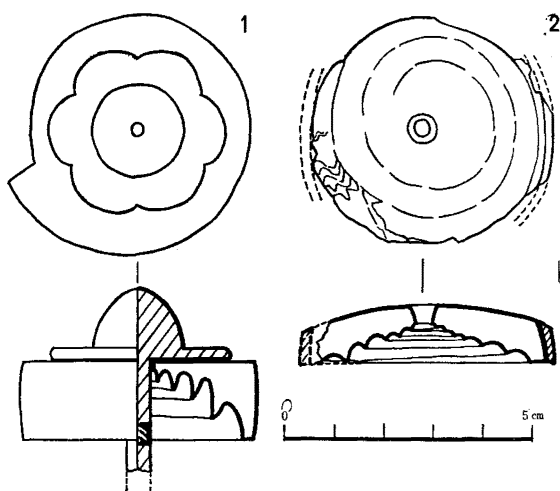
胡虜殄滅天下復 風雨時節五穀孰

長保二親得天力 樂兮

これと細部まで一致する鏡鑑として兵庫県(摂津)三島郡土室村石塚古墳出土の同類鏡が知られている。⁽⁴⁾また同鏡は富岡謙蔵氏によって「銅梁四神鏡」或は「四霊三瑞鏡」の名称で考証されており、⁽⁵⁾銅梁は中国四川省合川県の南にある名山であることが解説せられている。鏡背文様や銘文から王莽代の作とされている。

ダンワラ古墳もすでに湮滅したものであるが、たまたま奈良方面に転売された日田出土と伝える金銀錯嵌珠龍文鉄鏡が梅原末治博士の注意するところとなつて、現地踏査があり、出土地が豊後三芳駅東方約四百米の台地裾に営まれた堅穴式古墳であつたらしいことがつきとめられた。⁽⁶⁾鉄鏡は径二一・三釐で、中国でも類例の少い鏡背を嵌玉の金銀錯龍文で飾った素晴らしい遺品である^(図版 一上)。惜しいことに全体のほぼ半分をとどめる程度に剝落しているが、本来の構図をうかがうことはできる。すなわち鈕をめぐる四葉座を配し、葉間に金線による「長宜子孫」銘を一字宛記しているが、「子」字は剝落している。鏡縁には渦雲文帯がめぐり、内区には渦雲文風な龍文を配しているが、その

両眼や休軀の一部に赤や青の珠玉を嵌入している。このような金銀錯文ある鉄鏡は中国戦国時代にあらわれているが、その技術を漢代に踏襲作成したものと思われる。この古墳から共伴した遺物には鉄刀、轡などあつたという。現在、本鉄鏡は京都市の住友博古館に収蔵され、幸いに実見の機を得たが、二個の巻貝製雲珠を伴っている。この貝製雲珠は他にも出土例がある。管見にふれたものでは日田市友田・吹上横穴出土と伝えるもの⁽⁷⁾、^(第7 図1)、日田市朝日町才



第7図 貝製雲珠実測図

れて遺物が発見された(第8図)。古墳は湮滅したが、ところとなって現存している。出土品は次のとおりである。

- | | |
|-------|-----------------|
| 仿製六獣鏡 | 一 径一二・七釐 (図版二下) |
| 仿製珠文鏡 | 一 径 八・三釐 (図版二上) |
| 勾玉 | 一 碧玉製 |
| 管玉 | 一〇 碧玉製 |

古代の日田(小田)

田の天神山古墳のもの(同図2)、筑後・山門郡瀬高町大草出土のもの(福岡県指定)がある。いずれも巻貝を横切りにして中心に金銅製の花形座を伴う棒を通してある。またダンワラ古墳例と日田市天神山古墳例は鉄製外輪のなかに巻貝をはめこんだ手法のものである。貝製雲珠もまた限られた分布を示している。

横穴式石室を内部構造にもつ後期古墳になると、日田盆地の周辺にはにわかに増加してくる。大別して円墳と刳拔横穴の二種があるが、学術調査を経て内容の判明しているものはきわめて少い。その中から内部構造や遺物によってある程度様子うかがえるものを取りあげてみよう。

有田古墳 日田市石松町有田

玖珠川の古岸、石松部落の背後台地上にあり、昭和三二(三年頃)梨畠にするために開墾された際に横穴式石室古墳が破壊さ



第8図 有田古墳の出土品(桑野陽吉氏提供)
(現在行方不明の遺物も含まれている)

丸玉 七〇 ガラス製、コバルト色

臚付蓋 一 須恵器

脚付壺 一 須恵器、今なし

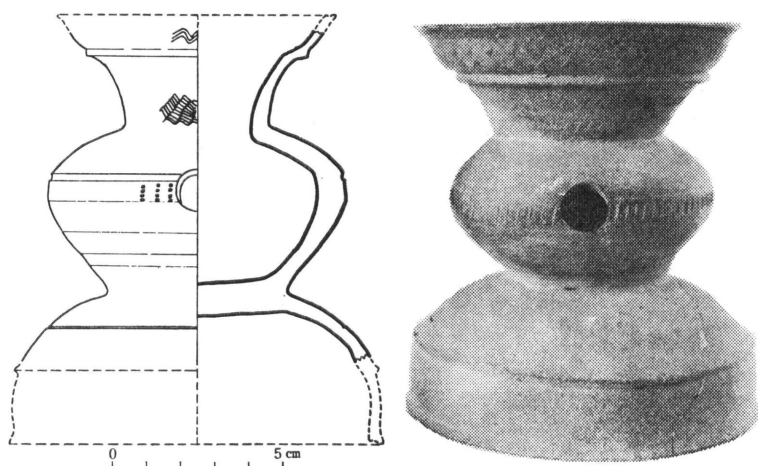
埴 一 須恵器

埴 一 土師器、今なし

坏 一 土師器、今なし

鏡鑑二面は緑鏽を帯びているが、銅質もさして良質でなく、表面が剝離しやすい状態で、珠文鏡の損傷が特に著しい。管玉は長さ二・五厘、径七〇八耗と大形品である。仿製六獣鏡、管玉ともに後述する日田市法恩寺山第四号古墳のものによく似ている。現在する須恵器についてみると臚付蓋は珍らしい遺品で、臚の口縁と蓋の下半部が欠損しているのは惜しまれるが、復原高一二〇三厘となろう(図左)。臚の形態が示すところは古式の須恵器の特徴をよく保っており、今のところ豊後地方における須恵器としては最古期に位置づけられる。埴は高さ一一・四厘、口径九・一厘の短頸丸底である(巻末須恵器編年図参照)。

臚付蓋は、最近佐賀県杵島郡有明町・龍王崎第三号古墳からも発見されており、高さ二・四厘と大きさも有田古墳のものに近い(第9図右)。また臚の形態もきわめてよく似ているが、龍王崎古墳例の方がやや古い特徴をもっている。有田古墳では、これが脚付壺の蓋にあたることは論をまたないであろうが、九州地方でも今のところ類品に乏しい資料



第 9 図 二 付 蓋 例
(左・日田市有田古墳, 右・佐賀県龍王崎第三号古墳)

であるから、脚付壺のなくなったのは惜しまれる。須恵器の編年上からも、有田古墳は日田地方だけでなく豊後地方で最も古く位置づけられる現状である。

法恩寺山古墳群⁽¹⁾ 日田市刃蓮町大字日高字法恩寺

国鉄日田駅と豊後三芳駅の間にあり、国鉄線の北側に接近した山丘尾根上に七基の円墳が並んでいる。西から東に一号……七号と数えて、一・二・六・七号墳は未掘である。

第三号古墳は径二〇米、高さ四米の円墳で、横穴式石室が南西に開口する。開口したのはかなり古く、遺物も十分に知ることとはできないが、琥珀製喪玉、ガラス製小玉、馬具(轡・雲珠)、須恵器などが発見されている。

石室は全長八米に及ぶ複室構造で安山岩をもって構築されている。石室の構築には奥壁に一枚の大石を立てているほかは、割石を平積みしており、いわゆる腰石の使用はない。後室壁面は次第に上方に持送って空間をせばめてゆき天井は一枚石で覆われている。高さ約四・六米に及ぶ。各室の境には圓石が設けられ、横長くつくられた前室では通路の左右に障石を立てて三区に分ち、左右二区にも被葬者を追葬できるように設計されている。この古墳を有名にしたのは赤色塗料を使用して壁画を描

いている点である。奥壁とそれに接する西壁に同心円文、後室通路北側袖石には円文と馬?、前室より後室にむかいた正面観の左右袖石には騎馬人物らしき図像、その上に構築された石には同心円文と飛鳥?が描かれている。

第四号古墳は三号古墳の東にあり、径一三米、高さ三・五米の円墳である。未掘墳であったが、昭和三年八〇九月賀川光夫・小田らによって発掘調査が行われた。日田盆地における古墳の学術発掘はこれが初めてであり、その後も今日までこのような調査はない。また成果の面でも注目すべきところが多く、この地方の古墳研究上特筆すべき意義がある。この古墳は南西に開口する単室構造の石室をもつものであった。石室プランは幅二米、奥行二・六米、羨門にむかって幅をせばめてゆき羨門付近では一・五米となる。奥から一・二米のところでは板状石をならべて障石となし、石室を前後二区に分けている。奥壁は高さ一米ほどの安山岩の一枚石を立てて、さらにその上に割石を平積みして天井に至る。左右両壁は腰石を使用せず、上下通じて割石を平積みしている。壁面は上方に次第に割石を迫り出させて空間をせばめてゆき一枚石の天井に終わっている。高さ二・六米である。羨門は扁平石をはめこんで閉塞し、羨門袖石の左右には割石を積みあげて石垣状態をつくっているが、著しく外開きとなって、一種の前庭状を呈している。

遺物は大部分が石室の左右壁ぞいにならべられているが、鏡や刀や玉類は障石で区切られた後区に発見され、被葬者の身辺につけられたことを物語っている。(図版三下)。出土品は次のとおりである。

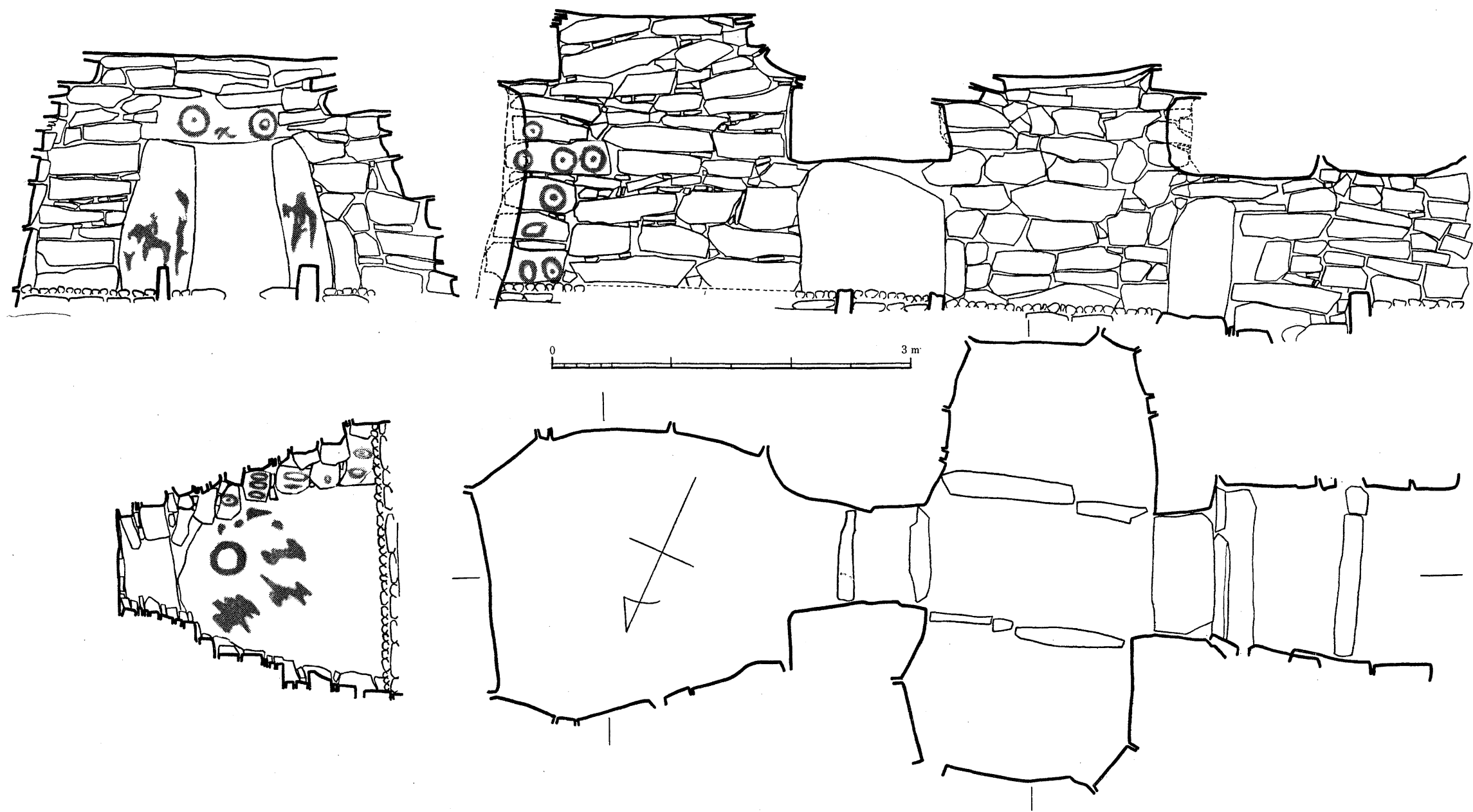
仿製五獣鏡 一 径一一・二釐 (図版三上)

勾玉 一 瑪瑙製

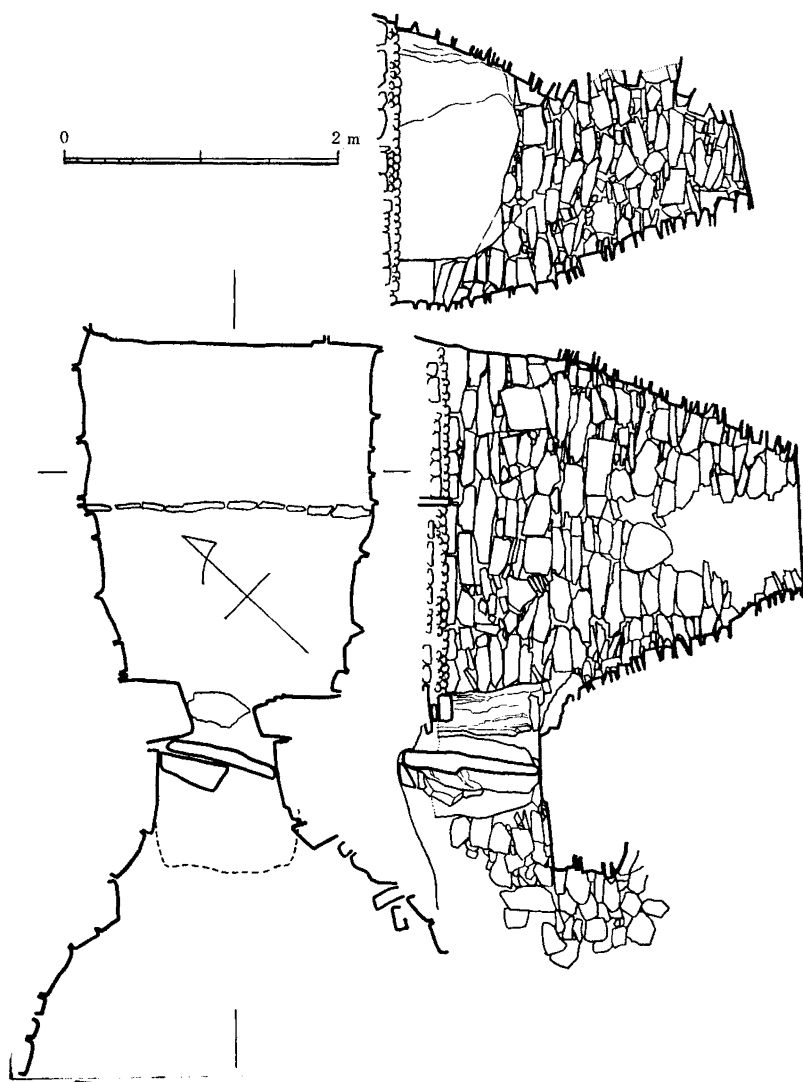
管玉 九 碧玉製

切子玉 六 水晶製

算盤玉 一 水晶製



第10図 法恩寺山第三号古墳石室実測図（「法恩寺古墳」により一部修正）



第11図 法恩寺山第四号古墳石室実測図

古代の口田(小田)

小玉 八一 ガラス製、淡青色

直刀 二

鉄鏃 五五

刀子 二

轡 二

鈴雲珠 一

鐙状辻金物 二

鉸具 二

帯先金具 二一

脚付壺 二 須恵器

高坏 四 須恵器

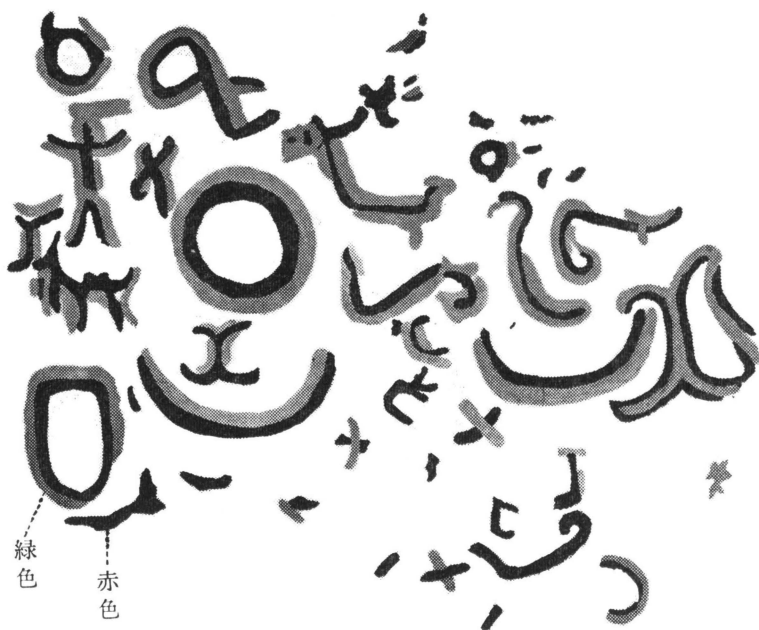
趣 一 須恵器

坏蓋 一 須恵器

提瓶 四 須恵器

被葬者は遺存していた人骨から三体確認された。小児一、成人二と判定されている。したがって出土遺物もすべて同一時期とは考えられず、初葬と追葬の分離検討の要がある。鏡鑑・玉類・須恵器(巻末須恵器編年図参照)などの比較において前述の有田古墳と近いものがあるが、これよりさかのぼることはない。

第五号古墳は天井石がとり去られてかなり破壊されているが、日田高校高倉芳男教諭のもとに本石室より発見された須恵器が収蔵されていて、それによれば、四号墳より年代は下降するようである。



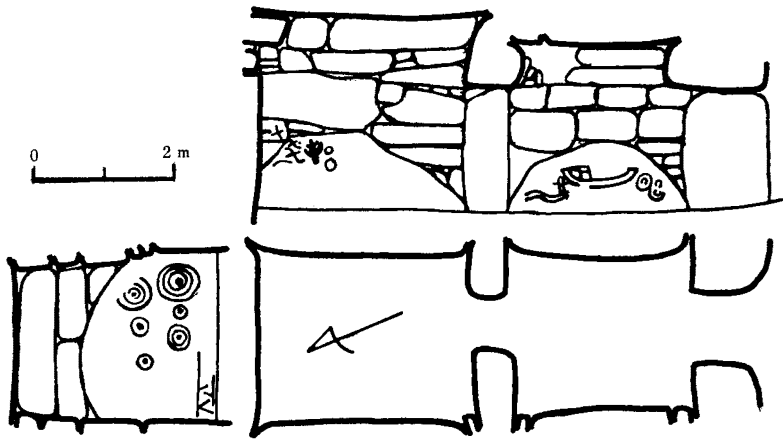
第 12 図 ガランドヤ第一号古墳奥壁の彩色画

以上三古墳の年代は四号墳―三号墳―五号墳の序列が考えられ、六世紀中頃から後半の時期に比定されよう。

ガランドヤ古墳群 日田市石井字西園

石井部落に北接する冲積地にあり、三隈川が曲流するところにあたり、東西に三基の横穴式石室古墳が並んでいる。中央が第一号古墳、西側が第二号古墳、東側が第三号古墳で、いずれも安山岩で構築されているが、封土が流失して石室が露出している。第三号古墳はほとんど破壊されて石材の一部がのこっているのにすぎない。三基とも南むきに開口する複室構造のものである。

第一号古墳は前室に土砂が充満していて室内の構造は完全には判明しないが、前後二室を通じての全長六・五米、後室の幅二・七米、高さ三・二米である。壁面の構築には腰石を立ててその上に平積みしてゆくが、迫り出しはほとんどなく箱形に近い断面を示している。奥壁には



第13図 穴観音古墳石室実測図

彩色画が描かれている。並列する二艘の舟と波、その上に円文、騎馬人物、飛鳥かと思われる図柄などが赤色で描かれ、これらの赤色のまわりをさらに緑色で縁どっている。石室内の土砂を除去した折に須恵器杯の蓋一個(巻末須恵器編年図参照)と金銀一個が発見されている。

第二号古墳も同様な構造であるが天井石がとられ、石室内部は土砂で埋まっている。奥壁に赤色による同心円文三個がみられるが色彩がかなり流れている。

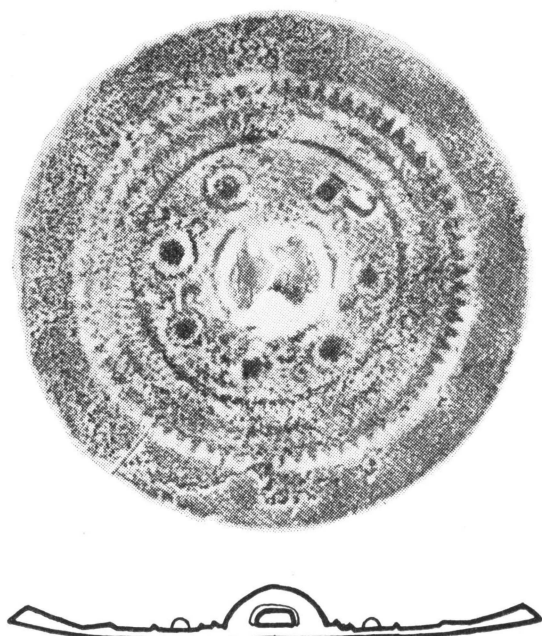
穴観音古墳 日田市内河野字倉園

ガランドヤ古墳群南方の台地上にある。高さ二米、径一〇米の円墳で、南に開口する横穴式石室がある。羨道は早くなくなり、全長七米の前後二室がのこっている。安山岩を使用してガランドヤ古墳群に似た箱形構造をなす。この古墳は早くから彩色壁画があることで知られているが、壁画は後室の奥壁と右壁腰石、前室の左右腰石にみられる。後室奥壁には同心円文を並べ、右壁には舟に乗る人物、飛鳥、円文が描かれている。前室右壁には同心円文、舟、波乗りしているかにみえる人物、左壁には二艘の舟と同心円文がみられる。赤、青二色を使用していることはガランドヤ第一号古墳の場合と同じであるが、穴観音では緑色の縁どりが赤の内側に施されている。さらに注意すべきは前室の舟や同心円文の彩色の内側石面をた

たいては剝離させ、全体を凹める手法がみられることである。出土品は不明であるが、石室の構造、壁画の技法、画題にガランドヤ第一号墳と共通するところ多く、ほぼ同時期に比定してよいであろう。

日隈古墳 日田市日隈町亀山公園 日隈神社境内

さきに江戸時代に細線式獣帯鏡が出土した遺跡と同所であるが、現在日隈神社に保管されている遺物には、この漢鏡のほかに仿製七乳文鏡一面、銅製鈴釦片一個、鉄地金銅張馬具片（鏡板？ 杏葉？）一個がある。鈴釦に「昭和十五年六月三日亀山神殿南垣外ニテ発見」の貼紙があつて、さきの漢鏡とは発見の時期も地点も異なるので別の古墳としてあつかうべきものである。仿製鏡は径七・



第14図 仿製七乳文鏡（実大）

一種の小形品で、外区は複線波文帯の外側に鋸歯文帯をめぐらしている。内区は七個の珠文を配し、各々にこれを囲む圈線と双脚を付している。鈴釦は高さ二・五厘以上の円形銅板に鈴をとりつけたもので、鈴は現在二個のこっている。おそらく後期古墳時代の墳墓があつたと思われる。

このほかに日田盆地には剝抜横穴群が多い。凝灰岩系の崖面が発達しているあたりに群をなして横穴を削りぬいたもので、次の諸遺跡がその主なものである。

夕田横穴群 日田市上手町夕田

古代の日田（小田）

水目横穴群 日田市水目

刃連横穴群 日田市刃連町刃連

三郎丸横穴群 日田市友田字三郎丸（星隈山）

吹上横穴群 日田市友田・吹上

丸山横穴群 日田市丸山（月隈山公園）

これらの横穴群はかなり古くから開口していたらしく、すでに湮滅したものも少なくないであろう。正確な数はまだ確認するにいたらないが、大正一四年に日名子太郎氏が調べたところでは日田盆地における横穴の数七五二と計上されている。⁽¹²⁾なかでも吹上横穴群は有名であつたらしく、出土品蒐集家のもとにある遺物には吹上横穴出土と伝えるものが多い。したがってさしたる根拠もなく附会した資料も少なくないと考えられる。特に須恵器、土師器の類には古式のものから奈良時代に及んでいて、古式のものについては疑わしい点も感じられる。

後期古墳の編年研究において今日最も拠りどころとされるのは、ほとんど普遍的に発見される須恵器に指標を求められる。近時各地で須恵器研究は盛んであるが、九州でも肥後・豊前・筑後などで成果をあげている。⁽¹³⁾豊後地方では未だこのような試みはなされていない。したがって豊後地方における須恵器編年の尺度がつけられるならば、日田地方の後期古墳の編年研究に資するところも少くない。豊後地方に須恵器が出現した時期は明らかでない。古墳の副葬品としてあらわれる須恵器で最も古く位置づけられるものは、先述した如く日田市有田古墳である。これにつづくものとして法恩寺第四号古墳の須恵器があげられるが、両者の間は型式編年の上で直結せず、他地方の資料で埋めねばならない現状である。今のところ好資料に恵まれないが、玖珠郡田の口出土資料⁽¹⁴⁾をもってあてておこう。

法恩寺山第四号古墳の資料は第Ⅲ様式の古式の時期の標準としては今のところ豊後地方でこれに代る資料はない。セットとしてそろっている点で重要である。題のごとく第Ⅱ様式にさかのぼるような特徴を示すものもあるが、セッ

トとしてとらえるときはやはりⅢ式に組み入れるべきであろう。Ⅲ式前半までは古式須恵器の特徴を伝えていることについては別に筆者も説いたことがある。⁽¹³⁾ 吹上横穴出土と伝える子持須恵器の如きもこの時期の所産である。⁽¹⁵⁾ この時期の後半から豊後地方には群集墳が急激にあらわれており、杵築七双子古墳群⁽¹⁶⁾に好資料がみられる。ここではさらに第Ⅳ期、第Ⅴ期までの資料が継続して七世紀代までたどることができるので古墳時代終末期までの墓制がたどられる。日田盆地でこれらの時期に対応するのは法恩寺山第三号古墳、同第五号古墳の資料であるが、散逸したものもかなりあるので、第Ⅴ様式の存否は確認されていない。このほか第Ⅳ様式の古期に属するものとしては北海部郡佐賀関町中ノ原古墳⁽¹⁷⁾の坏類もあげられる。これによって七双子古墳群資料のなかからも同時期のものが抽出できる。この時期で注意されるのは、横瓶がみられることであろう。横瓶の出土例はきわめて少いので、その出現時期についてはまだ定見を得ないが、古く玖珠郡北山田村の横穴出土品⁽¹⁸⁾にその例があって、資料の所在不明となったのは惜しまれる。またガランドヤ第一号古墳出土の坏の蓋は第Ⅲ式の古期から新期に移行する特徴をもっていて、ガランドヤ古墳、穴観音古墳の年代推定に重要な手がかりを与えてくれる。本稿では豊後地方の須恵器編年を目的とするものでないので詳説を避けるが、一応の尺度をつくっておかないと日田盆地における後期古墳の編年の位置を定めることができないので、上述の概要のような趣旨で巻末付図のような編年図の作成を行なった。これを出発点として、今後資料の増補をはかり完成したいものである。この結果、次のような編年序列が成立する。

有田古墳―法恩寺山四号―法恩寺山三号―法恩寺山五号

穴観音古墳

ガランドヤ古墳

乃ち有田古墳を六世紀初頭、法恩寺山四号を六世紀中頃、法恩寺山三号を六世紀後半代に比定することができよう。なお、法恩寺山四号と三号の間には豊後地方における横穴式石室の複室構造出現の問題があるが、これについては別

古代の日田(小田)

に論じたこともあるので再説しないこととする。⁽¹⁹⁾

註

- (1) 大分県史料(9)考古資料 一四九頁 昭和三十六年
- (2) 賀川光夫「大分県に於ける三つの竪穴式石槨を有する古墳」(西日本史学第一五号) 昭和二十八年
- (3) 賀川光夫「東九州における二、三の在銘鏡」日本大学考古学通信第四号 昭和三十三年
- (4) 梅原末治「摂津の古墳墓」考古学雑誌四卷八号 大正三年
同 「摂津の古墳墓(補遺)」考古学雑誌七卷七号 大正六年
- (5) 富岡謙蔵「古鏡の研究」一五頁及び二九七頁 大正九年
- (6) 梅原末治「豊後日田出土の漢金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡」国華八五三号 昭和三八年
- (7) 日田市故武内伝蔵氏収蔵品。現在行方不明
- (8) 別府大学所蔵
- (9) 「福岡県の文化財」一九八頁 昭和四三年
- (10) 佐賀県教育委員会「龍王崎古墳群」昭和四三年
- (11) 賀川光夫・小田富士雄「法恩寺古墳」昭和三四年
- (12) 日名子太郎「速見、玖珠、日田三郡及別府市古墳横穴調査一覽表」大分県史蹟名勝天然記念物調査報告第四輯 大正一四年
- (13) 原口長之「肥後の須恵器の編年試案」西日本史学会創立十周年記念論文集 昭和三四年
小田富士雄「九州の須恵器序説―編年の方法と実例(豊前の場合)―九州考古学22 昭和三十九年
小田富士雄「筑後における須恵器の編年」塚ノ谷窯跡群 昭和四四年
- (14) 玖珠町公民館所蔵
- (15) 小田富士雄「大分県日田市吹上の子持須恵器」九州考古学14 昭和三十七年
- (16) 賀川光夫、入江英親、小田富士雄「七双子古墳群」大分県文化財調査報告書第八集 昭和三十七年
- (17) 賀川光夫、小田富士雄「北海郡那佐賀関町の古墳調査報告」大分県文化財調査報告第一五輯 昭和四三年
- (18) 河野清実「玖珠郡北山田村の横穴」大分県史蹟名勝天然記念物調査報告書第九輯 昭和六年
- (19) 小田富士雄「横穴式石室古墳における複室構造の形成」史淵百輯 昭和四三年

四、装飾古墳文化の系譜

六世紀代の古墳については日田盆地の周辺に開口したものも多く、早くから識者の注意をひいていた。特に内河野の穴観音古墳は装飾古墳として古くから知られていた。⁽¹⁾しかしながら日田地方の装飾古墳が本格的に研究対象として注目されるようになったのは、昭和二五年以後のことである。同年夏、森貞次郎氏等が当時知られていた唯一の装飾古墳であった穴観音古墳を彩画顔料調査のために訪れた際に、ガランドヤ古墳の二基に壁画を発見した。さらに同年一二月には賀川光夫氏の調査によって法恩寺山第三号古墳の壁画が発見されて、⁽²⁾にわかに日田地方の後期古墳が脚光を浴びることとなった。かくして翌年これらを総括した賀川氏の報告が公表されたが、⁽³⁾やがて賀川氏はこれを契機に大分県全域にわたる装飾古墳の調査を行なうにいたった。

また、古く日名子太郎氏の報告に吹上横穴群に属する日田市友田・上原の一横穴に「飾壁ニ彩色文様残存セルモノアリ」⁽⁴⁾と記されたものがある。現在これを確認することはできないが、これを加えれば、日田地方に五基の装飾古墳が存在することになる。現在大分県内で知られている装飾古墳はこのほかに次の五基を数えることができる。

鬼ヶ城古墳 玖珠郡玖珠町帆足・平田山 線刻
鬼塚古墳 玖珠郡玖珠町小田 彩色

千代丸古墳 大分郡挾間町宮苑・千代丸 線刻
鬼塚古墳 東国東郡国見町中・蛙石 線刻

加賀山横穴群 宇佐郡四日市町一鬼手・加賀山 彫刻・彩色

大分県内における装飾古墳の半分は日田盆地に集中しているという結果になるのであって、隣接する筑前、筑後地方に多い装飾古墳との関連において理解される面が多いことを示している。

古代の日田(小田)

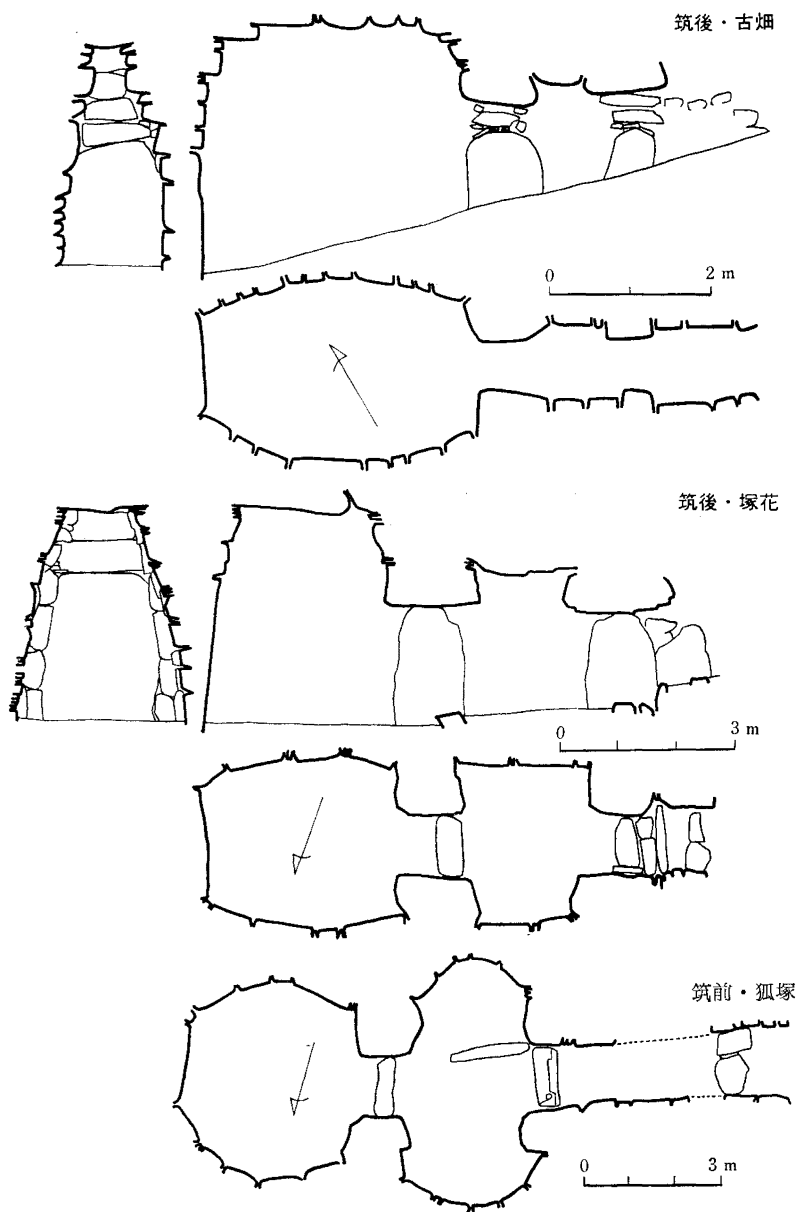
日田盆地の装飾古墳は石室構造からみて二種に大別することができる。乃ち、一つは法恩寺山第三号古墳であり、もう一つは穴観音古墳、ガランドヤ古墳である。先ず法恩寺山第三号墳は奥壁に大石を立てているのは、壁面の構築に腰石を使用していない。最下段より石材を平積みしながら高く積み上げ、次第に迫り出させて空間をせばめ、後室の横断面は高い梯形をなす。プランは左右の壁面に胴張りをもたせていわゆる三味線胴形を呈する。前室は追葬に備えてか特に胴張りをもたせて奥行きより左右幅を広くとっている。したがって横断面は後室ほど壁面を迫り出させたり、天井を高く構えることはできない。

穴観音古墳は長方形プランをもち、壁面最下段に腰石を立てて、その上に石材を平積みする。しかも壁面の迫り出しはほとんどなく、垂直に近い壁面を構成するので、横断面は長方形をなす。ガランドヤ古墳もこのタイプに属している。

次に装飾画の面から検討してみると、両者共彩色による壁画系古墳である点で共通している。これは大分県その他の装飾古墳が線刻文様を主としているのに対して日田地方の特色といえよう。文様の種類と壁画が施された部位についてみると、法恩寺山第三号墳では後室奥壁とそれに接する部分の側壁、後室に通ずる通路側面、前室より後室に向う正面の両袖石とその上に構築された石にみられる。文様は同心円文、騎馬人物、馬、飛鳥⁽⁵⁾などである。穴観音古墳は後室の奥壁と片方の側壁、前室の両側壁に施文されているが、ほとんど腰石に限られている。ガランドヤ古墳では奥壁に限られる。文様の種類は穴観音古墳が同心円文・舟・波・群鳥・人物・ガランドヤ古墳が同心円文・舟・波・人物・馬である。穴観音古墳タイプの方が舟や波など法恩寺山古墳タイプにない図柄がみられて種類が多い。さらに両者を明瞭に区別できるのは法恩寺山三号タイプでは顔料が赤色一種に限られるが、穴観音タイプでは赤、緑二種を使用して図形の輪郭を二重に縁どる手法がみられる。特に穴観音古墳では同心円や舟の彩色による輪郭の内部にあたる部分の石面をたたいて剝離させて凹めるといふ他の装飾古墳にみられないような技法を併用している点が注目され

る。装飾古墳顔料の化学分析をされた山崎一雄博士によれば、赤色は酸化鉄を主とするもので、鉄を多く含有する粘土の如きものを焼いて得たものという。また緑色は緑色に近い岩石、例えば緑泥石のような緑色岩類の粉末を使用したと推定されているが、くわしいことはまだわからない。九州の装飾古墳ではこのほかに黄・白・青・黒などの顔料が使用されているが、一般に終末期に近い装飾古墳では赤一色、或いは赤と黒、赤と緑または青の組みあわせで使用する傾向がある。なかでも豊後地方の装飾古墳で二色の組みあわせがみられるのは穴観音とガランドヤ一、二号の三古墳だけである。

以上の比較によって日田地方の装飾古墳に二つの異なるタイプがあることが明らかになった。乃ち石室構造と彩色顔料、彩色部位において顕著に示されている。今のところ法恩寺山三号タイプは豊後地方の横穴式石室に類例をたどることはできないが、筑前、筑後方面にたどることはできる。隣接する筑後浮羽郡の装飾古墳では古畑(第15図)、寺徳、塚花塚(第15図)などの複室墳があり、単室で胴張りプランのもものでは日ノ岡、珍敷塚、鳥船塚などをあげることができ⁽⁷⁾。なかでも左右幅が広く、追葬のために障石を立てている点では筑前朝倉郡の狐塚古墳(第15図)が最も近いであろう。なかでも古畑古墳から塚花古墳への移行は複室構造の形成から定型化への方向性を示していることが知られる⁽⁸⁾。これらの古墳は六世紀中頃から終末期に比定することができる。乃ち法恩寺山三号タイプは六世紀後半に筑後浮羽郡地方で盛行した石室タイプであり、それが日田盆地に及んだものと推察される。次に穴観音タイプはこれまた六世紀後半から七世紀にかけて筑後浮羽郡の重足、下馬場、前畑、薬師下北、同南などの古墳、筑前朝倉郡の観音塚古墳などにたどることができ⁽⁷⁾。この石室タイプはさらに広く北九州から肥後地方までみられるもので、豊後地方の装飾古墳は多くこのタイプに属する。このなかには後室奥壁ぞいに石棚を構築するものがあり、この技法も玖珠郡鬼ヶ城や大分郡千代丸古墳にみることができ⁽⁹⁾。このようにみると、日田盆地にあらわれた後期古墳の二つのタイプは、共に筑後川流域の筑前、筑後地域から日田盆地に入り、法恩寺山三号タイプはここできとどまったが、穴観



第 15 図 法恩寺山第三号古墳石室と類似構造を示す石室対照図

音タイプはさらに玖珠―大分―東国東の諸郡にまで流传したのである。この間にあって装飾文様は顔料入手や石面塗布のむづかしさのためか、彩色技法を略してより安易な線刻技法に転換した。また画題からも鞍、楯などの器材画が姿を消してしまったのも豊後地方の特徴というべきであろう。

註

- (1) 日名子太郎「装飾古墳」大分県史蹟名勝天然記念物調査報告第五輯 昭和二年
- (2) 賀川光夫「大分県日田市付近に於ける装飾古墳」考古学雑誌三七卷三号 昭和二六年
- (3) 賀川光夫「東九州地方に於ける装飾古墳」別府女子大学紀要第三輯 昭和二八年
- (4) 日名子太郎「速見、玖珠、日田三郡及別府市古墳横穴調査一覧表」大分県史蹟名勝天然記念物調査報告第四輯 大正一四年
- (5) 小田富士雄「九州」日本の考古学IV（古墳時代・上）昭和四一年
- (6) 山崎一雄「装飾古墳の顔料の化学的研究」古文化財之科学第二号 昭和二六年
- (7) 小林行雄編「装飾古墳」昭和三九年
齊藤忠編「古墳壁画」（日本原始美術5）昭和四〇年
- (8) 小田富士雄「横穴式石室古墳における複室構造の形成」史淵百輯 昭和四三年

五、古 代 の 日 田

律令時代の日田郡は「豊後国風土記」によれば

郷伍所^{里一}
十四 駅壹所

とみえているが、本文には石井、鞆編二郷が記載されている。「和名抄」には

日高郡 安伎・伊美・来繩・田染・津守

国埼郡 武蔵・来繩・国前・由染・阿岐・津守・伊美

海部郡 佐加・穂門・佐井・丹生・日田・在田・夜關・日理・父連・石井

古代の日田（小田）

古代の日田（小田）

とあってこの三郡の間に混乱がみとめられる。

まず日高については、「国造本紀」に比多国造がみえ、「延喜式」に日田郡とあるので、「和名抄」のみ日高とあるのは誤記または誤字であろうとする佐藤四信氏の所説がある。⁽¹⁾また「太宰管内志」の著者は

高は田を誤るかともおもひしかど〔同書（和名抄）九卷〕に肥前国小城郡高来ハ多久とも見えたれば誤りもあらざるべきか⁽²⁾

と指摘しているが、井上通泰博士はタカクをタクと約したのと、ヒタカの力を略したことを同一視したことによる誤りであるとして、この説をしりぞけている。⁽³⁾したがって風土記の日高は日田の誤りとみてさしつかえないであろう。

次に「和名抄」における三郡の郷名混乱は、「豊後国志」の著者によって

和名抄以日田五郷。悞入海部。而取国埼中。以為日田郷。伝写致之。

と指摘されたように、日田以下五郷が日田郡に属し、安伎以下五郷は国埼郡に属するものである。また日田以下五郷をとるとしても、実際には六郷記されている。佐藤氏は日田郡を誤って郷名とし、海部郡の条に書きつらね、そのために生じた日田郡の欠を補うために日高郡を設けて比多と訓ませたもので、「和名抄」が豊後の事情に通じない者によって幾度か転写を重ねる間に生じた誤記であろうと推測している。したがって日田郡五郷は在田以下の五郷をとるべきこととなる。そうすれば、風土記にみえる鞍編、石井以外の三郷は在田、夜關、日理となる。父連は鞍編である。

このうち夜關は夜開^{よあけ}、日理は亘理^{わたり}（亘理）の誤記であるという考証が諸氏の風土記研究によって重ねられていてほばしたがってよいであろう。父連については後述するところともかわるので少しく説明を加えておこう。管内志に「今里人は又連と書て由支比と唱ふるなり」と記されているようにユキイと訓まれている。鞍^あはもと又と書かれ、編は連と通じてアムと訓まれるので、鞍編は又連と同義である。「和名抄」の父連は又を父と誤写したとみるべきであろう。以上のような考証を経てさだまった日田郡五郷を現地に比定してみれば、石井郷は風土記に「在郡南」とあ

り、三隈川より南の盆地南縁からその南、肥後阿蘇に通ずる山岳地域が含まれる。日田市石井町にその名がのこっている。風土記の石井郷の条に、

郷中有^レ河、名曰^ニ阿蘇川^一。其源出^ニ肥後国阿蘇郡少^な国^を之峯^一、流到^ニ此郷^一、即通^ニ球珠川^一、会為^ニ一川^一。名曰^ニ日田川^一。年魚多在。遂過^ニ筑前筑後等国^一入^ニ於^ニ西海^一。

とあるが、阿蘇川は大山川で阿蘇郡小国の山々（少国之峯にあたる）に発して日田盆地に到り、球珠川（玖珠川）と合して日田川（三隈川）となり、ここには年魚（鮎）が多くおり、筑後川に通じているという実際とよく符合している。

鞍編（又連）郷は風土記に「在^ニ郡東南^一」とあり、日田盆地の東南縁、玖珠川—三隈川の北側地域があたる。今の豆田町、田島町、刃連町のあたりが含まれる。風土記の鞍編郷の条に、

郷中有^レ川。曰^ニ球珠川^一。其源從^ニ球珠郡東南山^一、流到^ニ石井郷^一、通^ニ阿蘇川^一。会為^ニ一川^一。今謂^ニ日田川^一是也。とあるが、よく實際に合う。刃連町の名称に郷名をとどめている。

在田郷は鞍編郷の北にあり、盆地の北東をさかのぼる花月川の流域があたる。今の有田町にその名を継承している。日理（亘理）郷は石井郷の北にあり、盆地の北半部から背後の山岳地域があたる。花月川下流の右岸地域が含まれていて、歴史的にも弥生時代以来盆地で最も早く開発されたところである。吹上町渡里に名称をとどめている。

夜開郷は盆地の西端で、筑前、筑後と境域を接し、三隈川が峡谷を流れて筑後川に通ずる日田盆地への関門を扼す位置を占めている。大肥川流域にこの郷の奥行きを広げており、日田市夜明に郷名を伝えている。

このように日田郡五郷を比定してみると、日田盆地はまさに五郡の交会するところにあたり、九州の東西を結ぶ要衝であるのみならず、古代の日田郡における政治、文化の中心としての性格をもっていたといえよう。これをさらに具体的に知るために律令時代に整備された駅制の面から日田盆地の位置をみれば、石井郷に石井駅一所がある。「延

古代の日田(小田)

喜式」によれば太宰府を発して隈崎―広瀬―把伎の筑前三駅を経て豊後に入っての第一駅である。乃ち筑前朝倉郡杷木町附近に比定されている把伎駅から日田市石井町附近に比定せられる石井駅に通じている。石井駅はさらに東行して玖珠郡荒田駅、北行して豊前下毛郡下毛駅にも連絡していたようである。このような東西を結ぶ交通路は弥生時代の青銅器の道に、また古墳時代の装飾古墳の道に具体的に示されたように、先史時代以来次第にさだまった東西交流の歴史的ルートであった。それが律令制下に公的に整備されたものであったといえよう。

風土記に記された日田郡五郷、駅一所を手がかりにその実際の地域区分を考定してきたが、一般に古代の郡、郷が地勢に拠って区分されている場合が多いこととあわせみると、日田郡五郷の政治区分もきわめてよくこの理に合致しているというべきであろう。したがってこのような地域区分は大化前代から多分に地勢に拠って自然発生的に成立した地域共同体の歴史的背景に負うているとみることができる。乃ち、この地域区分は律令時代以前の日田盆地及びその周辺の政治区分にも適用できると考えられる。このように考えてくれば、日田盆地に成立した古墳文化も各々小地域を単位とする共同体社会との関係において理解される面をもっている。今、各郷地域別に前述した主要古墳をあげてみると次のようになる。

在田郷 城山古墳(前方後円)―有田古墳(円)

ダンワラ古墳(?)

鞍編郷 丸尾古墳(前方後円)―法恩寺山古墳群(円)

日隈古墳(?)

日理郷 天神山古墳(前方後円)―吹上横穴群

ガランドヤ古墳群(円)

石井郷 姫塚古墳(円)

穴観音古墳(円)

夜開郷 ?

これによって、各地域における五世紀から六世紀代の推移を大観することができ。ここにあげた古墳は現在までにある程度の調査を経て内部構造なり遺物なりが知られるものに限ったので、さらに将来調査のすむにつれてかわがるべき遺跡も増加して一層詳細になってゆくであろうことを期待している。夜開郷の地域は現在までのところ調査はほとんど行なわれていないが、地勢からみても五郷中最も条件が劣っていることは否めない。日理郷は古墳時代よりも弥生時代に栄えている。古墳時代に下って栄えてくるのは鞍編郷、石井郷であり、在田郷はやや劣っている。地勢上最も好条件に恵まれたのは鞍編郷で、三隈川と花月川にはさまれた現在の日田市街がのっている沖積地と盆地東南の台地を擁している。古墳の分布もこの地域が最も多い。これにくらべると石井郷はやや劣るが、いくつかの小河川の流域に形成された狭長な低地と、広い台地とから成り、古墳時代になって進展した台地の開発と、律令時代に石井駅が設置されたように、交通の要地としての性格に負うところが大きいであろう。こうして鞍編、石井二郷が日田郡中でも律令時代下って優位にあった歴史的條件は、五、六世紀代に形成されていたのである。

なかでも鞍編郷にある今の日田市田島町のあたりは、江戸時代日田の学者森春樹の「亀山抄」にも律令時代の日田郡家の所在したところと云われて、律令時代への連関をみる上にも今後の調査が痛感されるところである。風土記鞍編郷の条には

昔者、磯城嶋宮御宇天國排開広庭天皇（欽明天皇）之世、日下部君等祖、邑阿自、久仕^ニ奉鞍部^ニ。其邑阿自、就^ニ於此村^ニ造宅居之。因^レ斯名曰^ニ鞍負村^一。後人改曰^ニ鞍編^一。

とあって、六世紀代にこの地域を本貫とする日下部君邑阿自なる豪族が拠っていたことを伝えている。また日下部氏は鞍部に奉仕したと記されており、鞍負の村名が起ったと伝えている。これによって日下部氏が鞍を生産する軍事部民を掌握し、鞍負の兵士を統率して中央の大伴連に奉仕する性格をもっていたことが知られる。⁽⁴⁾ 鞍負の設置は五世紀

古代の日田(小田)

後半にまでさかのぼると云われているが、六世紀代にも靱部として出仕しており、七世紀までその伝統がつづいている。また、天平九年(七三七)の「豊後国正税帳」の最初、玖珠郡の部分の前に、

都合壹拾玖間

不動五間 備倉三間
動用三間 麴稻納八間

大領外正七位上勲九等日下部連吉嶋

少領外從七位上勲十等日下部君大国

主帳外少初位上勲十等日下部君 死

とあって郡司がすべて日下部一族で占められている記載がみえる。近年井上辰雄氏は正税帳の検討を行なって、この部分を日田郡のものであると結論している。⁽⁵⁾その論拠は前掲風土記にみえる日下部君の伝承から日田郡と関係が深いこと。大領、少領、主帳各一人という郡司構成は日田郡五郷が下郡にあたる令制の規定と符合していること。正税帳の郡の記載順序が「延喜式」における日田、球珠、直入、大野、海部、大分、速見、国崎と太宰府から豊後に至る順路の記載と合っており、このような記載法が古代を通じて踏襲されていることの三点である。以上のことから井上説は従ってよいと思われる。日下部氏が靱編郷に拠って怡頭したのは五世紀代にさかのぼることができ、以来、律令時代には日田郡司として勢力を拡大し、日田郡一円に根をおろした在地豪族であった。したがってその本貫地であった靱編郷に郡家が設けられ、また日下部君本家の墳墓が郷内に営まれたであろうことも容易に推察できるところである。あたかも風土記に記された欽明天皇の世前後に比定される注目すべき古墳として、法恩寺山古墳群が浮びあがってくる。この古墳群は尾根上に七基並列していて、時期も六世紀代を中心に七世紀にまで及ぼうとしている。この古墳群を日下部君本家の幾世代かにわたる墓所に比定してさしつかえないであろう。

律令時代の下つての遺跡として古瓦を出土する次の三遺跡がある。

林工高校遺跡

日田市丸山・日田林工高校々庭

大波羅神宮寺跡 日田市田島町大原・大波羅神社境内

慈眼山遺跡 日田市上城内・慈眼山

林工高校遺跡は通称月隈山にあり、日理郷にあたる。林工高校を創立した明治年間に整地して発見されたという軒丸瓦一点が保存されている。すでに遺跡は湮滅しているので、どのような性質の遺跡であったか知ることはできないが、日田盆地で発見された唯一の奈良時代軒先瓦である。瓦当面径一六糎、珠文縁複弁八葉軒丸瓦である(四上版)。中房内の蓮子は一四一八の配列を示し、中房は高く、蓮弁は肉盛りある優品で、筆者のいう鴻臚館式瓦の特徴をよく表わしている(四上版)。太宰府系古瓦の正系が日田盆地にまで到達していることは注目し値する。筑後川流域に類例を求めれば、筑前朝倉郡・長安寺跡、筑後浮羽郡吉井町冠・永松氏邸内遺跡がある。大宰府から日田盆地までの間に類品の出土地を点々とたどることができる。

大波羅神宮寺跡は鞆編郷に属し、大波羅神社に神宮寺があったという伝承にもとづいている。大波羅八幡社は社記によれば貞観十三年(八七一)建立と伝えている。境内より格子目叩文の平瓦が出土しており、桶巻造りの手法をみることができ。格子目には二種あるが、いずれも奈良時代にさかのぼるものである(四下版)。今後の調査がのぞまれる。

慈眼山遺跡は鞆編郷内にあるが、大波羅神社の北約一粍の山麓にあり、大波羅神社のものとよく似た桶巻造りによる格子目叩文平瓦を出土している。最近このあたりは宅地化していて奈良時代の須恵器なども出土している。早急な調査を行なって遺跡の性質を明らかにする要がある。

一般に古代の瓦出土遺跡は寺院跡と官衙跡の二者が考えられる。寺院跡の場合には瓦当文ある軒先瓦や礎石を伴うが、官衙跡の場合には必ずしも瓦当文ある軒先瓦や礎石を伴うとは限らない。その意味では日田盆地で寺院跡の可能性があるのは、林工高校遺跡であり、大波羅神宮寺跡も大波羅神社境内にあるところからみてやはり神宮寺の可能性

古代の日田(小田)

は捨てがたい。これに対して慈眼山遺跡は官衙跡の可能性が考えられ、靱編郷内にあるところからも注意しておいてよいであろう。考古学上から郡家の候補地として今後の調査に期待したい。このように考えてくれば、これらの古瓦出土遺跡もまた日下部氏一族の関与した可能性が第一に考えられるであろう。

〔補記〕本稿に引用した史料のうち豊後国風土記は佐藤四信「豊後風土記の研究」に拠り、豊後国正税帳は竹内理三編「寧楽遺文」に拠った。また歴史時代の条定制の問題はほかに分担研究者もあるので本稿では省略した。

註

- (1) 佐藤四信「豊後風土記の研究」 昭和三十一年
- (2) 伊藤常足「太宰管内志」中巻六二頁 昭和四四年
- (3) 井上通泰「豊後風土記新考」 昭和一〇年
- (4) 直木孝次郎「日本古代兵制史の研究」 昭和四三年
- (5) 井上光貞「大和国家の軍事的基礎」(同氏著「日本古代史の諸問題」所収) 昭和二十四年
- (6) 井上辰雄「豊後国正税帳をめぐる諸問題」(同氏著「正税帳の研究」所収) 昭和四二年
- (7) 小田富士雄「九州に於ける太宰府系古瓦の展開(一)」九州考古学2 昭和三二年

あとがき

筆者が日田盆地の考古学調査を手がけるようになった初めは昭和三二年の法恩寺山古墳群の発掘調査であった。別府大学の賀川光夫教授の知遇を得てこの地域の調査を始めて以後数年、この地方の資料調査をすすめたが、その後多忙のため中断するに至ったが、昨年から始められた九州文化史研究所の日田に関する総合研究の一員に加えられてより、はからずも再び日田調査を継続するようになった。今回の資料調査にあたっては賀川教授の業績に負うところ多く、地元研究者の穴井通照、梶原尚之、桑野陽吉、日田市立博物館の方々に多大の便宜を与えられ、また九州大学考古

学研究室の真野和夫君にも援助を受けた。本稿は以上諸氏の御世話によって、筆者が昭和三二年以来かかっていた日田調査の総整理を試みたものである。それでも紙数の都合で割愛した資料が少くない。これについてはまた後日の機を得たいと考えている。本稿で過去の成果をまとめると共に、さらに今後の研究をすすめる出発点ともなることを期する次第である。関係者各位に感謝申し上げる。おわりに、本稿をまとめる機縁を与えられた九州文化史研究所の杉本勲教授にも感謝申し上げる。(一九六九・一一・二八)

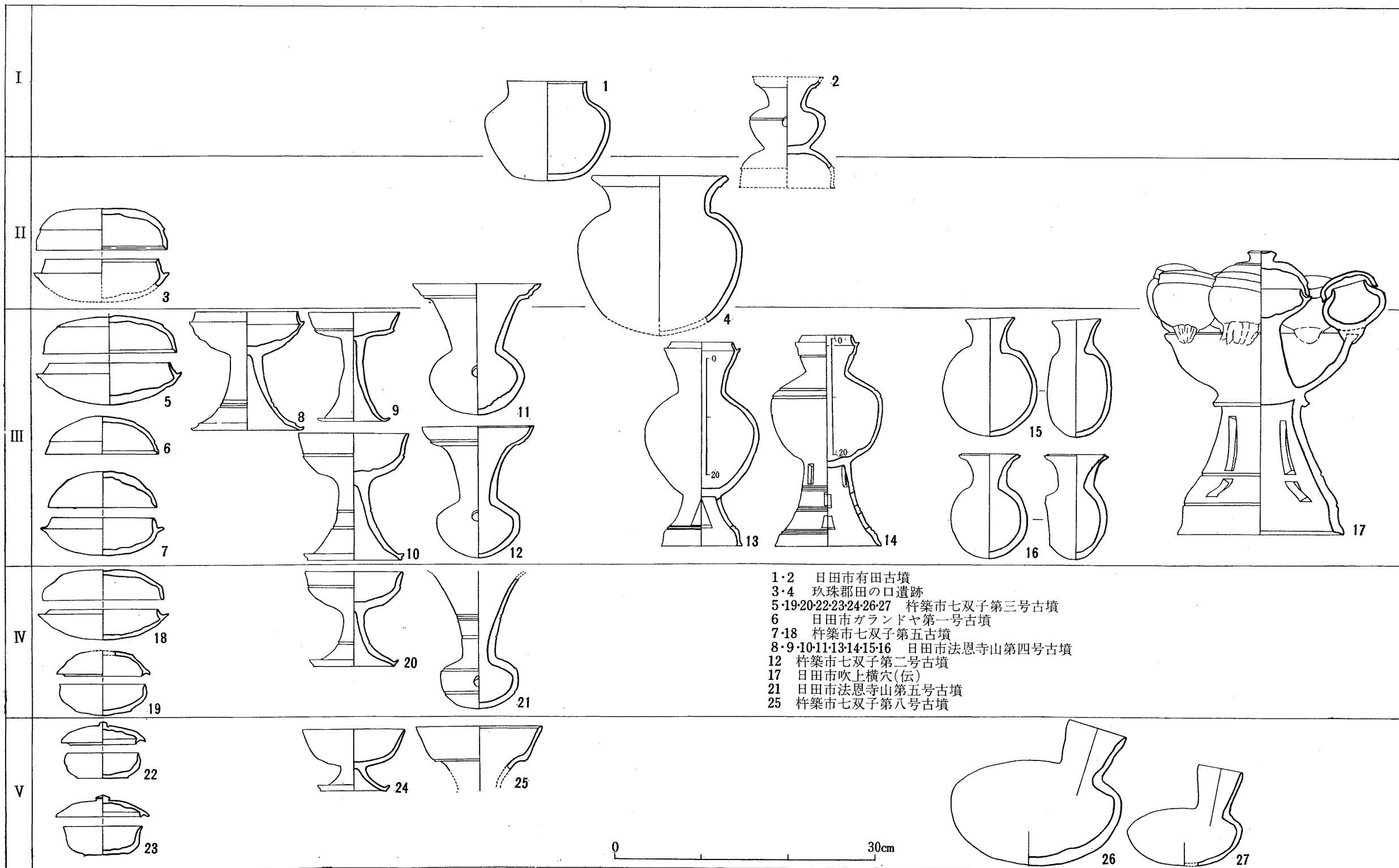
日 田 市 内 遺 跡 地 名 表

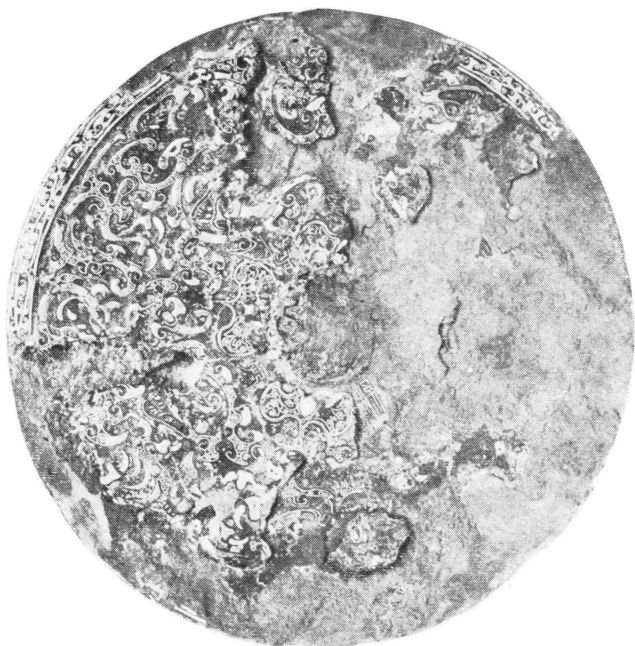
古
代
の
日
田
(小田)

No.	遺 跡 名	所 在 地	備 考
縄 文 時 代			
1	川 下 遺 跡	高井字川下	土偶片
2	原 遺 跡	内河野字原	
3	大 部 遺 跡	大部町大部	
4	隈 山 遺 跡	石井町隈山	
弥 生 時 代			
5	吹 上 原 遺 跡	吹上町大字友田字渡里・吹上原	湮滅
6	草 場 遺 跡	清岸寺町草場	
7	天 神 原 遺 跡	朝日町天神	
8	元 宮 原 遺 跡	神米町元宮	
9	上 野 原 遺 跡	上野町上野原	
古 墳 時 代			
10	城 山 古 墳	諸留町城山	前方後円墳
11	有 田 古 墳	石松町有田	円墳, 横穴式石室, 湮滅
12	羽 野 横 穴	財津町羽野	前方後円墳
13	天 神 山 古 墳	朝日町才田	
14	夕 田 古 墳 群	上手町夕田	
15	夕 田 横 穴 群	〃	円墳
16	水 目 横 穴 群	水目	前方後円墳
17	丸 尾 古 墳	上城内	
18	丸 尾 神 社 古 墳	田島町田島	
19	鳥 羽 塚 古 墳	田島町会所宮	〃 , 湮滅
20	法恩寺山古墳群	双連町大字日高字法恩寺	円墳 7 基, 国指定
21	双 連 横 穴 群	双連町双連	金銀錯嵌珠龍文鉄鏡
22	ダンワラ古墳	日高町字東寺・ダンワラ	
23	上 井 手 古 墳	小ガ瀬町上井手	
24	千 人 塚 古 墳	大部町大部	〃
25	平 原 古 墳	琴平町平原	〃
26	姫 塚 古 墳	銭淵町姫塚	円墳, 竪内式石室 1, 石棺 3
27	寺 内 古 墳	石井字寺内	円墳 2 基
28	原 古 墳	内河野字原	円墳, 湮滅
29	穴 観 音 古 墳	内河野字倉園	円墳, 横穴式石室, 国指定
30	ガランドヤ古墳群	石井字西園	円墳 3 基, 県指定
31	津 辻 古 墳	石井町三丁目津辻	円墳
32	三 郎 丸 横 穴 群	友田字三郎丸 (星隈山)	

古代の日田(小田)

No.	遺 跡 名	所 在 地	備 考
33	吹 上 横 穴 群	友田・吹上	江戸時代に漢鏡発掘
34	丸 山 横 穴 群	丸山（月隈山公園）	
35	日 隈 古 墳	日隈町亀山公園・日隈神社境内	
歴 史 時 代			
36	林 工 高 校 遺 跡	吹上町・日田林工高校々庭	軒丸瓦
37	大波羅神宮寺跡	田島町大原・大波羅神社境内	平瓦
38	慈 眼 山 遺 跡	上城内・慈眼山	〃





金銀錯嵌珠龍文鉄鏡（径二・三粍） ダンワラ古墳

図版一 日田市出土の漢鏡二種



銅梁作細線式獸帯鏡（径二三・五粍） 日隈古墳

図版二 有田古墳出土鏡鑑



上・珠文鏡（径 八・三厘）
下・六獣鏡（径一二・七厘）



図版三

法恩寺山第四号古墳出土鏡鑑とその出土状況



仿製五獣鏡 (径11.2寸)

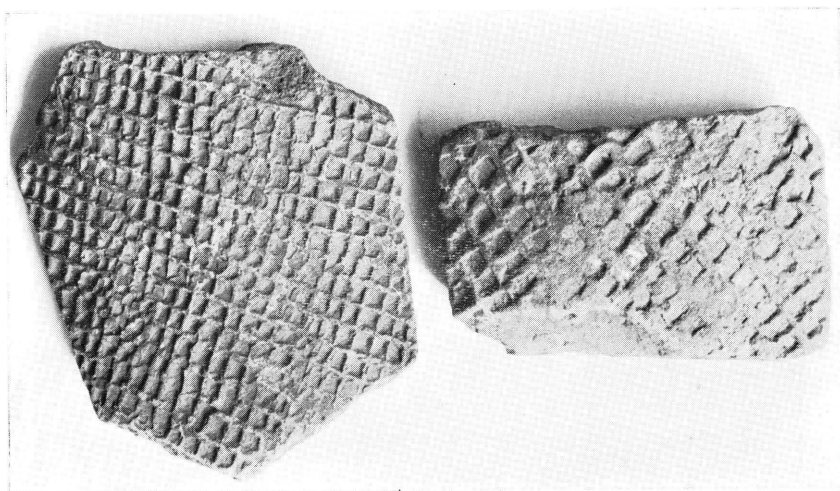


石室内の鏡・脚付壺出土状況 (穴井通照氏提供)



鴻臚館式軒丸瓦(径16廻)

林工高校遺跡



格子目叩文平瓦二種

大波羅神宮寺跡